

## 日本精神神経学会と私

早苗 麻子 Asako Sanae  
日本精神神経学会理事

今期、新たに理事に就任いたしました早苗麻子です。よろしくお願いたします。

約9年間の市中の精神科病院勤務の後、2000年に女性のためのメンタルクリニックを開き、今に至っています。街中の小さなクリニックの医者が、しかも開業前に「長」のつく役についたことのない者が本学会の理事になることは、これまででなかったと思いますので、私が理事になった経緯を書きます。

本学会に入会したのは1990年代で、2000年に開業してから、開業精神科医の横のつながりを求めて、日本精神神経科診療所協会に入会し、北海道の理事になり、日本の精神科医療を考えるチャンスにいただきました。周縁に位置する者の特権で、精神医療の進んだトリエステ近辺への研修旅行に何回も参加したり、バンクーバーの精神科救急の視察旅行、ロサンゼルスでのビレッジ研修にリフレッシュを兼ねて参加したり、かの地とこの地の違いに驚いたり変革の可能性を探ったりしました。2012年の札幌総会の時、札幌なら総会参加の交通費はかからないからといわれて代議員（当時は評議員）に立候補し当選しました。政府の「202030宣言（2020年までに30%を女性に）」を受け、組織の活性化にはダイバーシティが必要→女性の代議員を増やさねばならない→その方策を考える必要があるということで、2013年に男女共同参画委員会（2014年に男女共同参画推進委員会に改称）が作られました。そこへの参加が、委員会活動の始まりです。女性の代議員がなぜ増えないかは、妊娠～出産～育児、家事、介護といった領域を担ってきた女性たちの経験が生かされる場となっていないからだといえます。これらの経験が生かされる場とはどんな場か、はこれからみんなで考えていく必要があると思います。当時の首相から「女性をもっと輝ける社会を」といわれた時には、これ以上もっと働けといわれているのかと、どっと疲れた記憶があります。とはいえ、気がつけばいろいろな学会で女性参加が進んでおり、本学会は古い

体制を維持している学会になっていました。

2015年の大阪総会の時に、ドイツ精神医学会が、ナチス時代に精神科医が果たした役割についての検証に70年も要したことを謝罪し、ナチスの政策や思想を推し進めた精神科医たちを告発したことが話されました。内容も衝撃的でしたが、もっと驚いたことは、現在はまだ検証の途上にあるといわれたことです。私は、太平洋戦争の責任やさまざまな悲劇はすべて過去のことである、と漠然と思いこんでいたこと、そしてそれが誤りだと気づきました。トラウマ臨床では、語る言葉を手にするまでに、たくさんの時間を要するし、語られないまま終わっていくことも多々あることがわかってきました。そしてこのような気づきを与えられたことで、この学会に親しみを感じるようになっていました。

さて、女性代議員をどうやって増やすかに話を戻しますが、2017年に本学会理事より「代議員を増やす前に委員会活動をする女性が増えることが必要」といわれ、私は、法委員会と利益相反委員会を希望してどちらも受け入れられました。

2018年に、旧優生保護法下の強制不妊手術に対する国家賠償請求訴訟が始まり、旧優生保護法に精神科医がどうかかわったのか、学会としての態度を法委員会で検討することになり、検証作業が始まりました。1972年（当時私は19歳）、優生保護法改悪阻止のデモや署名活動に参加したことがあり、パリでは有名人たちが「私も中絶手術を受けた」というプラカードを掲げてデモしたことを覚えています。法委員会では、新潟、仙台、京都総会でそのつど検証報告をしており、現在は人文系の研究者の協力を得て、学際的な研究へと進んでいます。コロナ禍で、図書館を使えなくなったりとさまざまな困難が降りかかるなか、学会声明が出せることを願っています。

最後に一言、私がめざすのは、故生村吾郎先生が提唱された「地を這う精神科医」です。